

メディアセンターとしての学校図書館を コーディネートする取り組み

—情報活用能力育成の中核として活用される学校図書館をめざして—

学籍番号 199113
氏名 谷村 道
主指導教員 野中 拓夫

1. 問題と目的

急激な情報化のもたらす知識や情報の進展は私たちの生活を劇的に変化させている。社会の要請で学校の情報化も加速的に進み、ICTが推進されていった。そんな中、学校図書館の担当者は、学校図書館の活動に対して学校内で軽視され、時代から取り残されていくような孤業感を感じているという現状がある。

また、デジタルネイティブともいわれる今の小中高校生は、たくさんの情報の中にあって自分にとって必要な確かな情報を探し出し、正しい方法で相手にわかりやすく論理的に表現するための指導がなされないまま、情報の波の中に放り出されているのではないだろうか。本研究の目的は学校図書館が、教員と生徒の情報活用能力育成の中核となり学校の情報化に貢献することである。

2. 研究内容

研究Ⅰ 生徒とともに運営する学校図書館

【目的】研究Ⅰは実習校の問題の所在を明らかにし、学校図書館の3つの機能の土台となる「読書センター」の機能を果たすべく読書推進について実行することをスタートと考え、取り組むことにした。

【方法】(1)近畿地方の学校の図書館担当者の意識調査から実習校との共通点を知る。

(2)図書委員から全校生へと来館者を広げる取り組みを行う。

(3)一般生徒の考える学校図書館の改善策を実行する。

【結果・考察】

多くの大阪市及び近畿地方の公立中学校が組織的な学校図書館の運営ができていないこと、そして、ICT活用と学校図書館活用には乖離があるという共通した問題があることがわかった。まずは、「読書センター」として、来館者を広げるために、図書委員会の生徒が文化部に働きかけ、文化祭に出品した作品を図書館に展示することで、学校図書館が文化部の活躍の場となり、生徒の手作り感のある温かい雰囲気のある図書館に変え、図書館の来館者の開拓につなげた。次に、3年生の国語の授業「企画会議」の中で学校図書館の改善策を図書委員会が実行することで学校図書館の運営に生徒が主体的にかかわり、学校図書館が生徒の意見が反映される親しみのある場となることを試みた。

研究Ⅱ 校務分掌の改革

【目的】学校図書館が社会で必要な情報活用能力育成の学びを支援する場となるために、ICT活用と学校図書館活用は乖離したものであるという教員の意識を改善することや、学校図書館の運営における組織的な改革に取り組むことが研究Ⅱの目的である。

- 【方法】(1) 校務分掌の現状分析
(2) 校務分掌の見直し
(3) 教師のICT活用力向上の研修

【結果・考察】

ICT活用と図書館活用を融合したメディア推進委員会を発足し、教員と生徒の情報活用能力育成を支える組織作りを行った。情報教育の専門家である技術科の教員が学校の情報化を技術面でリードし、司書教諭である筆者が情報教育を取り入れた研修会を主催し、先生方と共に情報教育について学ぶ機会を提供するという役割分担をした。メディア推進委員会の図書館担当として読書推進の取り組みを提案すると、全学年での朝読書実施が可能となった。メディア推進の研修担当となり、さらにTeams活用という新たな業務が発生したことで、筆者がオーバーワークとなり図書館担当を他の司書教諭の有資格の先生に託すこととなった。そのことで、メディア推進委員会全体を見ることができるようになり、結果として図書館運営についても活性化していった。

3. 成果と課題

本研究では、司書教諭がメディアコーディネーターとなり、学校図書館をメディアセンターとして機能すべく、リーダーシップを発揮しながら、管理職とコミュニケーションをとり、教職員と他の関係者と「協調」し、最新の教育情報を入手しながら、メディアセンターを実現することを試みた。新しい組織を立ち上げるには、職場の中である程度の実績に基づく信頼と、十分な根回しと、最後は管理職の理解を得て、後ろ盾になってもらうことであった。一教諭の立場で組織を変えていくことは容易なことではい。管理職に働きかけたとき、個人でなく既存の組織のメンバーも変革を望んでいること、時代のニーズや学校の教育目標と合致していることなど、説得力のある説明に苦心した。メディア推進委員会が立ち上がったからも、本来筆者が望んだ学校図書館の情報化に手を付けるまでに、メディア委員会を軌道に乗せることにはかなりの労力と時間を要した。

図書館という場所は自分の意志で読書という楽しみを求めに行く趣味的な場所といった要素が大きい。それを社会が求める情報活用能力育成の施設とするには、環境を整えるだけでなく、名称を変えるというイメージ戦略も必要である。さらに、情報活用力の育成を実現するには、任意で行く場所でなく必然を作ることが重要である。情報活用力の育成を各教科の中でそれぞれの教員が工夫をしながら行うというのでは、個人差が出てしまうため、学校全体で組織的に行う必要がある。研究の終わりになって見えてきたことがある。それは、情報活用力の育成のための学習プログラムを作り、学校全体で組織的に計画的に実行するということである。学校図書館をメディアセンターとして機能させることがゴールではなく、子どもたちが情報社会の中で力強く生き抜くために必要な能力を育成することが目標であるということだ。